

社会的スキルが 適切な近しさの認知に及ぼす影響

池田 善英

問題

他者との関係に対応して、近しさ closeness を適切に示すことは、対人関係において重要である。

例えば大野木（2005）はメンタルヘルスの観点から、対人関係に影響する変数として“間合い”を挙げ、“対人関係のトラブルを予防する”としている。間合いを時間的間合い・距離的間合い・心理的間合いに分類し、このうち心理的間合いを“好き嫌いや親しみの度合いなど、気持ちの近さや遠さ”と定義している。このように近しさを適切に示すことの重要性を指摘している。

自己開示の研究は、自己開示を相互に返報することが、二者関係を強化し発展させることを示している。一方で自己開示の内面性と好意度が、逆U字型の関係を示す研究がある。内面性が中程度の場合に、好意度が最も高まることを表している。これは相手との関係において適切と見なされる近しさがあり、それに適合した行動を取った場合に対人関係が良好になることを示している。

池田（2009）は、どの程度の近しさを適切だと考えるか、について検討した。自己表出の個人差変数として、セルフ・モニタリングを取り上げた。対象として、職場の同僚、親しい友人、隣近所の人を挙げた。被験者にはこのような対象との関係が、どの程度の近しさの場合にどの程度望ましいかを尋ねた。

親密な交際の仕方については、セルフ・モニタリングの高い人ほど、より強く望ましいと判断していた。これはセルフ・モニタリングの高い人ほど、対人関係に積極的であることによると考えられる。セルフ・モニタリングの低い人には、親密な関係でも心理的な距離を残したいという、一種の天井効果が働くのであろう。

ところで社会的行動の巧拙を示す概念として、社会的スキルがある。丹波・小杉（2006）は大学生を対象に、大学生活・人間関係・トラブルなどのライフ・イベントの体験量と、社会的スキルとの関係を検討した。社会的スキルが高い人ほど、異性関係のライフ・イベントの体験量が多かった。このように社会的スキルが高い人ほど、他者と友好的なコミュニケーションを図り、親密な関係を築き易い。

なお社会的スキルは相川（1996）によると、質問スキル・会話スキル・謝罪スキルなどのスキル因子からなり、スキル因子はアイ・コンタクト・表情・声の大きさなどのスキル要素からなる。本研究では社会的スキルを、包括的な概念として捉えることとする。

また生起過程モデルによると社会的スキルは5つの過程からなる。1 相手の対人反応の解読、2 対人目標の決定、3 感情の統制、4 対人反応の決定、5 対人反応の実行、である（相川、1996）。特定の個別的場面では、1 相手の対人反応の解読に基づいて対象との適

切な近しさを認知し、その結果2 対人目標の決定に影響を及ぼすことになると考えられる。

本研究では池田（2009）に基づいて、他者との間にどの程度近い関係を築くことが望ましいと見なせるかに及ぼす、社会的スキルの効果について検討する。ここで取り上げる対象は、職場の同僚、親しい友人、隣近所の人であり、抽象化した他者であり、特定の個人を指すものではない。このような条件のもとでは、社会的スキルの高い人ほど他者と友好的なコミュニケーションを図り、親密な関係を築き易いので、社会的スキルの高群は低群より、近い交際を望ましいと判断すると予測する。

池田（2009）の被験者は女性のみであった。本研究では性別の効果も探索的に検討する。そこで女性に加え男性も被験者とする。

方法

被験者と手続き

被験者は大学生85名（男性25名、女性58名、不明2名）である。内訳は、東京都内にある私立T大学の学生37名（男性25名、女性10名、不明2名）、千葉県内にある私立W大学の女子学生48名である。2009年9月に、授業時間の一部を用いて集団実施した。

このうち回答に不備のある6名（男性1名、女性3名、不明2名）を分析から除外した。従って分析の対象としたのは大学生79名（男性24名、女性55名）である。内訳はT大学の学生が34名（男性24名、女性10名）、W大学の女子学生が45名である。

なお事前に、回答は強制ではないこと、回答を望まない項目に回答する必要はないこと、を教示した。

交際の望ましき

交際の望ましきの測定は、池田（2009）を一部改変した。

池田（2009）はNHK放送文化研究所（2004）を参考に、対象を3種類挙げた。“職場の同僚”、“親しい友人”、“隣近所の人”である。それぞれに対し2から3種類の親密さの交際を挙げた。“職場の同僚”および“隣近所の人”は3種類（疎遠な／中程度の／親密な）である。“親しい友人”との疎遠な交際は存在しないので、2種類（中程度の／親密な）とした。水準の数が異なることで比較が難易になっていた。

この点を解消するため、本研究では対象のうち“親しい友人”を“友人・知人”に代えた。また“友人・知人”に対する疎遠な水準を加えた。具体的な項目は以下の通りである。

職場の同僚	疎遠な	仕事に直接関係する範囲の付き合い。
	中程度の	仕事が終わってから、話し合ったり遊んだりする付き合い。
	親密な	色々と相談したり、助け合ったりする付き合い。
友人・知人	疎遠な	会ったときに、あいさつする程度の付き合い。
	中程度の	互いのことに深入りしない、気楽な付き合い。
	親密な	色々と相談したり、助け合ったりする付き合い。
隣近所の人	疎遠な	会ったときに、あいさつする程度の付き合い。
	中程度の	あまり堅苦しくなく、話し合えるような付き合い。
	親密な	色々と相談したり、助け合ったりする付き合い。

回答方法は“全く望ましくない”（1点）から“非常に望ましい”（5点）までの5件法である。

社会的スキル

社会的スキルの測定には、菊池（1988）のkiss-18を使用した。回答方法は“いつもそうではない”（1点）から“いつもそうだ”（5点）までの5件法である。全18項目からなる。

付加的な項目

友人関係のありさまを測定するため、加藤（2007）を参考に項目を作成した。友人関係の中のできごとを想起させ、相手との親密性と類似性を回答させた。

T大学の学生には“最近、実際に経験したストレスフルな友人関係の中で、最も不快であったできごとについて想起”させた。W大学の学生には“最近、実際に経験した温かい友人関係の中で、最も快であったできごとについて想起”させた。

親密性の程度は、その友人との関係について、“まったく親しくない”（1点）から“とても親しい”（5点）までの5件法で回答させた。類似性の程度は、その友人との関係について、“まったく似ていない”（1点）から“とても似ている”（5点）までの5件法で回答させた。

結果

社会的スキル尺度

社会的スキル尺度の因子構造を確認するため、主成分分析を行った。固有値1.0以上の因子を、5因子抽出した。累積寄与率は61.8%であった。ただし固有値の推移に基づき、本研究では1因子構造と判断する。また菊池（1988）も1因子構造と見なしている。そこで本研究では全体で1つの尺度として扱う。尺度の内部一貫性を確認するため、Cronbachの α 係数を算出した。 $\alpha = .869$ であった。尺度の内部一貫性はきわめて高いと言える。

社会的スキル尺度の合計点を算出し、被験者を中央値分割した。55点以上の40名を社会的スキル高群、54点以下の39名を社会的スキル低群とした。

以降の分析では、社会的スキルと性別とを共に独立変数として扱うことを、企図している。そこで両者の独立性を確認するため、社会的スキルと性別との χ^2 検定を行った（ $\chi^2(1) = .172, n.s.$ ）。社会的スキルと性別とは独立していた。従って以降の分析では、社会的スキルと性別とを共に独立変数として扱うこととする。

交際の望ましさに及ぼす影響

職場の同僚に対する交際の望ましさを従属変数とし、社会的スキル2（高／低）×性別2（男性／女性）×交際の親密さ3（疎遠な／中程度の／親密な）の3要因分散分析を行った（表1、図1）。社会的スキルおよび性別は被験者間変数、交際の親密さは被験者内変数である。社会的スキルの有意な主効果が認められた（ $F(1, 75) = 6.39, p < .05$ ）。社会的スキルの高群は低群より、交際の望ましさが高かった。交際の親密さの有意な主効果が認められた（ $F(2, 150) = 7.24, p < .001$ ）。親密な、中程度の、疎遠な、の順で、交際の望ましさが高かった。その他に有意な効果は認められなかった。

友人・知人に対する交際の望ましさを従属変数とし、社会的スキル2(高/低)×性別2(男性/女性)×交際の親密さ3(疎遠な/中程度の/親密な)の3要因分散分析を行った(表2, 図2)。性別は被験者間変数, 交際の親密さは被験者内変数である。交際の親密さの有意な主効果が認められた($F(2, 150) = 41.84, p < .001$)。親密な, 中程度の, 疎遠な, の順で, 交際の望ましさが高かった。その他に有意な効果は認められなかった。

隣近所の人に対する交際の望ましさを従属変数とし、社会的スキル2(高/低)×性別2(男性/女性)×交際の親密さ3(疎遠な/中程度の/親密な)の3要因分散分析を行った(表3-1, 図3-1, 表3-2, 図3-2)。性別は被験者間変数, 交際の親密さは被験者内変数である。社会的スキルの有意な主効果が認められた($F(1, 75) = 4.11, p < .05$)。社会的スキルの高群は低群より, 交際の望ましさが高かった。性別の有意な主効果が認められた($F(1, 75) = 11.47, p < .001$)。女性は男性より, 交際の望ましさが高かった。交際の親密さの有意な主効果が認められた($F(2, 150) = 6.29, p < .01$)。中程度の, 疎遠な, 親密な, の順で, 交際の望ましさが高かった。社会的スキルと交際の親密さとの有意な交互作用効果が認められた($F(2, 150) = 3.84, p < .05$)。単純主効果の検定を行ったところ, 社会的スキルの高群は低群より, 親密な交際の望ましさが有意に高かった($F(1, 77) = 5.31, p < .05$)。疎遠な交際の望ましさおよび中程度の交際の望ましさについては, 社会的スキルの高群と低群の間で有意な差は認められなかった。

表1 社会的スキル別の職場の同僚との交際の望ましさ

		交際の親密さ		
		疎遠な	中程度の	親密な
社会的スキル	高	3.55	4.20	4.33
	低	3.59	3.85	3.82

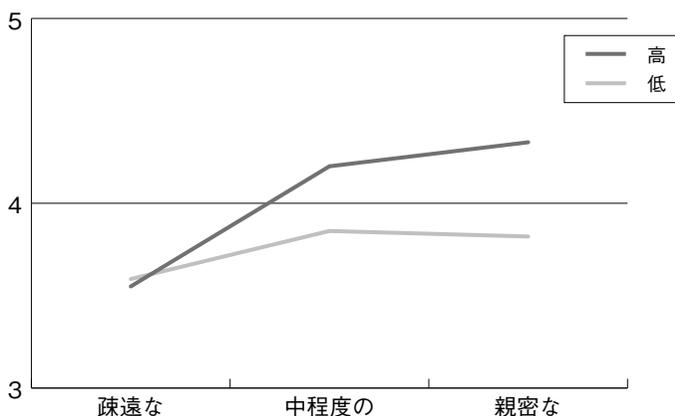


図1 社会的スキル別の職場の同僚との交際の望ましさ

表2 社会的スキル別の友人・知人との交際の望ましさ

		交際の親密さ		
		疎遠な	中程度の	親密な
社会的スキル	高	2.92	3.45	4.55
	低	3.03	3.85	3.64

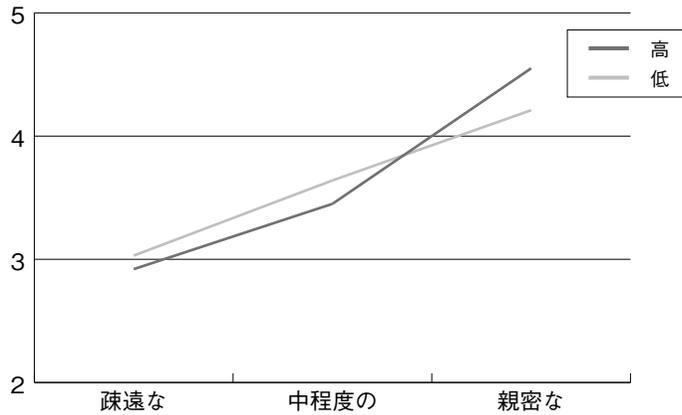


図2 社会的スキル別の友人・知人との交際の望ましさ

表3-1 社会的スキル別の隣近所の人との交際の望ましさ

		交際の親密さ		
		疎遠な	中程度の	親密な
社会的スキル	高	3.60	4.10	3.70
	低	3.82	3.82	3.15

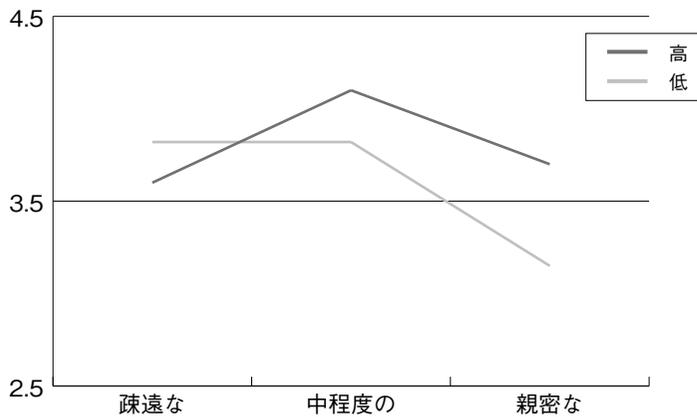


図3-1 社会的スキル別の隣近所の人との交際の望ましさ

表3-2 性別の隣近所の人との交際の望ましさ

	性別	交際の親密さ		
		疎遠な	中程度の	親密な
	男性	3.37	3.67	3.08
	女性	3.85	4.09	3.58

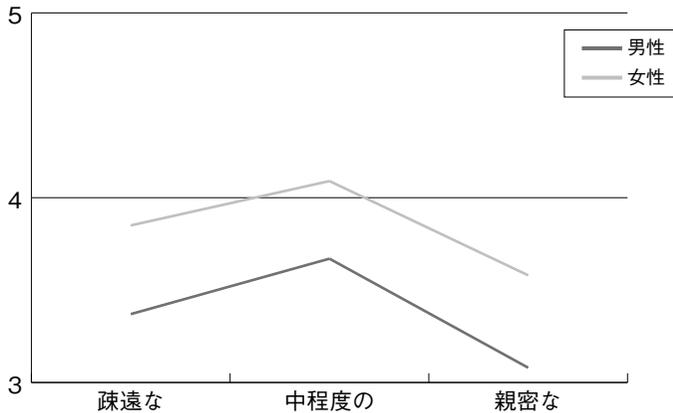


図3-2 性別の隣近所の人との交際の望ましさ

付加的な項目

不快なできごと 不快なできごとを経験した相手との親密性と類似性を従属変数とし、社会的スキル2(高/低)を独立変数とする、 t 検定を行った。社会的スキルは被験者間変数である。親密性は社会的スキルの高群($M = 3.71$)と低群($M = 3.17$)との間で異ならなかった($t(33) = 1.53, n.s.$)。類似性は社会的スキルの高群($M = 2.65$)と低群($M = 2.28$)との間で異ならなかった($t(33) = 1.12, n.s.$)。

快なできごと 快なできごとを経験した相手との親密性と類似性を従属変数とし、社会的スキル2(高/低)を独立変数とする、 t 検定を行った。社会的スキルは被験者間変数である。親密性は社会的スキルの高群($M = 4.35$)と低群($M = 4.29$)との間で異ならなかった($t(45) = .26, n.s.$)。類似性は社会的スキルの高群($M = 3.39$)と低群($M = 3.54$)との間で異ならなかった($t(45) = .54, n.s.$)。

考察

社会的スキル

本研究では、社会的スキルが、どの程度の交際の近しさを望ましいと考えるかに及ぼす影響を検討した。社会的スキルの高い人ほど、他者と良好な関係を築き易いため、より近い交際を望ましいと判断すると予測した。

友人・知人に対しては、社会的スキルの高い人も低い人も、親密な交際を望ましいとしていた。職場の同僚に対しては、社会的スキルの高い人は低い人に比べて、中程度の交際や親密な交際の望ましさが高かったが、社会的スキルの高い人も低い人も疎遠な交際を望ましく

ないとしていた。隣近所の人に対しては、社会的スキルの高い人は低い人より親密な交際を望ましいと見なしていた。

つまり社会的スキルの高い人ほど、職場の同僚や隣近所の人とも近しく、接しようとしていることが分かる。社会的スキルの高い人は低い人と比べて、他者とより近しくあるべきだと考えているようである。他者と良好な人間関係を築くことは社会生活上好ましいので、それを実現するスキルを有している者はそのようにありたいと思うのであろう。しかしそれを実現するスキルを有していない者にとっては、他者との距離を保つことによって人間関係の問題を発生させないようにしているのだろう。

性別

女性は男性より、隣近所の人に対して、相対的に近しく接しようとしていた。女性は地域社会に溶け込んでいるのかもしれない。そうならば隣近所の方は軽視できる他者ではなく、ある程度重要な関係と位置付けられるのであろう。一方、男性は地域社会から離れ、隣近所の人とは交際をあまりしないのかもしれない。

今後の課題

本研究では社会的スキルを包括的な概念として扱った。しかし特定の対象との特定の場面における相互交渉において、個別のスキル因子・スキル要素がどのように作用するかを検討することは、今後の課題である。

また本研究で取り上げた対象は、抽象化した他者である。友人・知人と言っても、被験者が想定したのは親友から顔見知りまで様々な対象を含んでいるのかもしれない。より具体的な対象・状況においても検討することが望まれる。

【引用文献】

- 相川充（1996）. 社会的スキルと対人関係 誠心書房
- 池田善英（2009）. 親密さに及ぼすセルフ・モニタリングの影響 東京成徳短期大学紀要, 42, 15-22.
- 加藤司（2007）. 大学生における友人関係の親密性と対人ストレス過程との関連性の検証, 23, 152-161.
- 菊池章夫（1988）. 思いやりを科学する 川島書店
- NHK放送文化研究所（2004）. 現代日本人の意識構造 第六版 日本放送出版協会
- 大野木裕明（2005）. 間合い上手 日本放送出版協会
- 丹波秀夫・小杉正太郎（2006）. 大学生の社会的スキルがライフイベントの体験に及ぼす影響 社会心理学研究, 22, 116-115.